信濃札集

911.3
シ

信濃札集

春

士朗居士

浅山ゝ霞日の出来て梅乃花
春咲く梅ぬれぬ日ハ雨の降
まそ空ゝ雲さくぬ枝も有
猫人よ雪を惜れとも雪残雪
枯井よいつまでゝ雪ゝ雪
言取を先ゝ雪ゝ山陰

時うしろ寄せにと寄り来
何をしてやらうしひす時ぬ屋敷
山里い有らうしひすの日部
花をやさしても仏をみるうり
まを柳の面やあさの道岩里
数うしに赤い角もまへ一猫の恋
是やうしにもくもこ屋も猫の恋
一木のまを面焼う河原こうか

まを面しにかや都の山のかり
大佛の面を尺を行まを辺に
あるる似ぬ人を赤の姫ふに
返を来て時う焼ぬきしにかう
すこうれをけ人形をこ屋うり
うとくと名歌の赤まを猫ふに
松さく一木立なり あるる山
咲みをて面もつうぬ 柳こう

ちらつきたなびて門出る桜の郭
問らきい花盗人の吉原の郭
花桜く仁と騒く独りこの宵
美七日ものも喰さぬ嵐山嵐
再嵐山乗る桜ひて
淋しかりしかるおもへ年のこの
ちのあたむきひらける菴もこの年
年くる花のこゝの暮りくれ

下二

こゝりき菴や桜は寂くを
吾朝は桜の本花咲
花なくて花乃いさよの夕ゝの宵
より聖みて
世を捨て歩行桜の山路に
義とりの歌みて
小くな花こゝをたゝねよ山

[illegible]

[illegible]

[illegible]

伏見すと日くれぬ来う桜の花
門涼や霧ふかぬ家の桜の花
掛しさや降る行 深の山信の雪
山の井は涼知来れ名残の郭
春を惜む雲れ来れ夢行歩
うたすると 探る時も来い行
ふるまい 泊も 涼来る 春

夏

山くらは 雨ふりこうもの
をふる 白ひ 蛙 ア ぬ 杜若
卯花 ふも 来て 垣内 男 の
若生ぬ 雨 ふ 時 呼ぬ 蛙 ちぬ
蛍 来て 山 ふ ハ 来 ル 寝 ル
あ ふ 坂 や 行 来 こ き 蛙 来
戸 の 破 て 蛙 来 の 市 ル

この子やまゝ四五尺いろ地高
百合咲くかたち良なるゆゑ
みゝ赤を先言目の美なる
白ゝに霧風もなき小あり
植て去る四月を庵の過ぬり
竹植る日も人の来て眠ぬり
故遠火や四之の隠ゝ月も時
来なる時やきゝ此の家の下

かんこなる時や枯木の二所
梅一さの中ゝ牡あり鳴なる
又鳴もまゝ初空や陽くまた
頼ゝくいつも月赤の部云
金屏の梅又こなり陽くまた
部云思ひ捨ても月赤ゝ事
ゆゝ心ゝ為ゝ三つもあれ好る
尺迄月の白ゝ玉変競なる

[illegible]の子やまゝ四五尺いなる此家の
百合咲くかたち良なるゆゑ
みゝうの花を先三月の末うゑ
白ゝ[illegible]に霧[illegible]もなき小あり
植ゑ去る四月を[illegible]の[illegible]
竹植る日も人の来て眠[illegible]
坂遠火や四五の篝[illegible]
[illegible]やきやの[illegible]

嬉しさにいくらもほとく鶯かな
娘かな枝にかけるちまきかな
鶴の舞ひ清く千代に竹の春
うき藤川は池一隅乃新かな
五月雨の伊勢子清き文字かな
さゝれつゝやまと屋振れる鳥かな
五月雨や都よる旅あやめ草
渺茫や舟をたよりに飛ほたる

水音をきゝつゝ音に飛ほたるかな
啼あへぬ鵜の声くらきほど
保乃夏日や夕良の一二ツん
すゝみ床や挿まひける花の枝
あつ湯のさまて夏のかな雲と蝉
年寄の多きは木曽北冬きゝ
都あま下涼しき味も志ぶまさり
夜涼み宿に来まさり夏の月

剃さへ雪よりもなほ北月
地北に撥ハ蟬時おそし
ゆふすゝもやもすゝ大を焚家の家
夕たちや 外一切の初きより
あるはあきさきくゆの蓮の郷
を移るゆのうるさよ蓮の中

秋

きりぎりすの麻を織る音
きりぎりすの河陰を渡る小舟の
好きを人を言葉と小舟の夏
家を吹きさへ相の一茶
菴のさへ捨ひ入るり 相一茶
好恨就を相良尼ゆ猫屋
蕉翁ゆ口を小車の花の上
天の川乗就ゆとを尼ゆ

[illegible]きゆる雲の四つよ天の川
[illegible]海の薄をかくる西瓜[illegible]
[illegible]の池[illegible]の[illegible]樓一の邨
松よ宵いとや[illegible]
[illegible]高い[illegible]一日の日も[illegible]
十日[illegible]吟[illegible]て[illegible]の[illegible]
[illegible]も[illegible]よ[illegible]の[illegible]
虹の根や[illegible]の[illegible]の[illegible]

湖の水の低さよ鴨[illegible]舞
萩[illegible]の[illegible]漁[illegible]虫の[illegible]
[illegible]因みて
付神の[illegible]を[illegible]の[illegible]
菴の[illegible]を虫の[illegible]
[illegible]時や[illegible]の[illegible]
[illegible]あよ[illegible]
[illegible]の影[illegible]

隠るゝに鳥の立る雲間かな

三日月に能似たものよ二日月

三日月は何まきれぬの名残かな

松陰のいや月さへて夜に入

嵯峨山の上よりけふの月

降にはむら霧晴むら月の雲

冷しくと月にあるゝ木枯かな

根あけても離れ薄きる藤月

須戸篠垣も月の名残かな

梅乃枝は明ても暫し月あかり

梅多の国に三人も月見かな

侘しくて人は覚まして須戸の梅

嬉恰の十斗付枯枝かな

月高く芝葉日にしく花の露

かゝ麻とちて久しき艶かな

月と日の間に澄り富士の山

秋の取る山の奥なも増りて
家しまの塔低をもる取るる
山多も自や金まん初紅葉
かりろき人おいかく東ぶる

伊勢みて

山金色藤と松ると金乃家
小松吹伊賀と祖の夕の雨
四北宮ぬ日ぶかりも蛾の雪

奥ぶ鯛人い頃者ぶ菊の花
高ぶ菊も作ぬ菴の色
ひぶ津ぶ月い光ぬ菊の花

岐阜山ぶて

ぶぶやとて沈ぶ庵を冬の松
行ぬいけも寄り行い庵の雪
門たてる行人も作り農の雪

五十嵐川

麻の洞みもすそ川に澄わたり

鴈枯同し暮秋の鐘の聲

鶉こくや荊や囲れ焚夕煙

枯て冬しき松こそ見ゆれ秋の山

冬

時雨きていつれ淋しき三日の月

鳴海みて時雨初けり芋蔵の結

来らくに冬網ハ時雨し冬木立

冬の日の戸に押当る杉落葉

鷺鴨の啼ハ枯て川芦辺に

鴨の脊に船寄せける寒かな

鷗を鴨て埋る扨明の雨

宇治にまあり網代に越る思ひかな

橋柳に火ハかく成ても網代守

老残る人や枯野の芋の経

枯れ枯れや世をうき草の犬
山の月うら枯れの一ツ家
萩の中なる一木あり家の
家やとの方秋ふかきあり家の
それ世を思ひ出の面白き小家の
程ふるあり分や蕃家見て世の
無れ言あり会る陰る桜すゝ
家みる感む橋のあるうの事

志ほのみてを氷る小舟の事
昇なきあるを家の子孫
ふあるき一家二家やそ木立
そ木立秋の志ゝ山志ゝ秋も
さりゝと若ふむそ月の月形
出る月を見る家主その菴
月あるい人も住なりそ月山
閑とかなりそのあ

隙まても寒さ出けり冬の月

さゆる〳〵と降あく空や冬の夜

寒月に立並ふ松の影斗

思ひ出や夕細初雪の給庵山

松竹やあらしハ雪に埋もれく

さハつても雪ハ降なり奥山家

大雪の新路を隔る山路斗

よそ人の寒さも寐ぶり松の雪

降雪のミ寺ハ門も風取れ

風雪や此ミち由けハ福ふる鳥

風雪の足も早なり枯むくら

行年のこゑりともやぬ山家ハ

雑

りうも見え〳〵乃紫不尽の山

住けひてかしこき竹の林哉

大空よ限なき鶴の齢かな　魚堂

鶴鳴やかすをころりと和尚の浦　方明

向ふ行船の高さよ冬吉鳥　尾張　岳輪

木枯や菜の葉よ白む鶴の足　騏六

志やもくくと紫ふの竹を行　五雄

竹植て枯る木深くあらはるる　変阿

三日月やかの中を一光星　大阜

雲早き月よりこりて枯尾花　廿汝

かくこそとりよ急き梅の白しい　椿堂　伊勢

家とたよふ雲行柏よ月夜　牛徒

樹梢や表を紀する芋おくり　有吾

草枕戸やゆしの月のかすみぬ　野渡
井戸や人の蓋する朝の霜　六車
木枯の吹やうて星の光り　布川
寒て孤を秋末寒の山　ひとを
蓋板戸をや踏ならす　雲ち
蛩吹て物くしさる松穀堆　丘高
落電い蘭向寄り花すすき　尾張　平砂
秋風や寺をうつぬ山の奥　大蘇

仲間う泣ぬ鹿の萩の花　帯梅
雲の北の北かぶ多のさいこと　野雀
寒や西や行人　梅の花　硯静
ふに所や寒良のふの墓賣　得芝
峯ち雲直や行末の新志　由肆
旅人ち寒のかる彩塔の寒　伊勢　南泉
松風の寒空を尺ち寒の庵　推巳
寒寒ち　梅の木持て燈ち　滄波

三月や光線日の山さえる　霍鳴

花ゝ出日毛年光寄日ゝ　尾張　竹有

太春や蛍這出屋の　面　楠良

蛍光蜂奥光さいき〳〵小の上　逸人

逃ゝ芦ハ拾ゝ生ゝ　諸の重　五道

仲植〳〵泊行ゝ　松ゝ　沙鷗

大竹を植ゝ拾ゝや角ゝ　月底

白象手懸ゝ山京ゝ　應汀

見不のゝきゝ　美濃　草人

蝶ゝの　斬ゝ　月　千阿

故一ゝ仲の秋風　尾張　鹿野

茶待や唯一ゝねの　苔の面　葛井

孫人ハ何ゝ石ゝ　黄山

家象踏〳〵歩行　桃蹊

蛍咲〳〵風拾ゝの　求巳

山手庫ゝ記除ゝ　梅向

白妙や猶忘草の中　三河　秋峯

雪いとき猶よ雪切株の端　卓池

草の根の穴々ゑら〳〵彼岸花　江戸　巣兆

ちと形しき花い咲り草くさ　燕布

芭蕉忌や菴へ掩ひ炭　信　来蛾

待星の裾よ垂るや貸小袖　路川

椿もちるつき影や芒州　三巴

夢の余根い早〳〵小面降　夫山

仲〳〵ふく敷草よ似る蔵ふ　吉仆

苟菜もやみと芽を吹奈ゑい　淋山

阿房とい注ろいるん茅　堂　國村

水影ゐもうと角ひ〳〵世あい　陸奥　雄湖

ちる花い酒の醒るよ似るふ　文卿

涼ひゝ沖の鯖先を焚　男　買月

松風よ涼さをほ〳〵稼う郎　介岱

雲いふふ山の冬ゆり麦の蛛　南祖

山の井手樋の碎くり反木立　谷水

る借や秋い地の峰　義　河月

宮城野やくまき作る秋の萩　子孝

萩ゝ咲いれくもるく蓋る白　白夜

麦の秋はんくゝ生ゝ湖の遠ゝ　世竹

改発て参原枝なきし柳の秋　旧人

花もなきし別墓やうこ猫の恋　日人

蜂の子の蟻ゝ猫の頭　幸　江戸　成義

出家海めいたる秋のあきひ　木海

三日月よおさ海のあきふ　もゝ之

夏後の蟬幸のあを忘ゝ　画牛

賜の秋海へおゝゝや栗拾ひ　守静

納の秋金象のあれ小さ弘　一澄

智年あてもつゝ生らゝ文　衣　一瓢

思ふ家をたつさあ組の海弘　一峰

行春西見も秋く雲とあ　陸奥　湖雲

奥たちてうの浮ミ〳〵　夏の梅　物白

雲を出を流し流して雲雀空　浦人

咲梅のこころまきりぬ　祝の白　有是

松井の嘉〳〵皆迎〳〵　涼堂

肥を撰ま　杖寒中　芋蕪　菓便

顔いくの　明月梅ま　朱ま　蔵　如陸

寒ありしうさへなくて　先　本立　晋我

二ツ三ツ　咲ちまの　誠の　新蕨　ありま　口戸　道彦

蕨来て　故郷つれ　ちもと　ゆるこ　護物

浮草の　ちれまつくや　子の　乱　茅外

寒ゆの　むりく　降本　ゆ弘　麻生

何ゆ　用あり　出ゆ　梅の　蕪　五流

ゆゆ　辞て　義の　花　様の　花　一惠

呼　寺り　蕪ま　二月　麦　ノ旦

投　て　度　乱あり　無　稼　奥　乙二

子　蕪　先　実の　ゆり　部　公　百邪

何為て旅人交を松交を　柳郊
問る　お住まる子も　躑躅　東原
藤の門の柳潛を　ながらり　與人
紀の書きなるも　呼ぶん　蓮は示　天民
はしまし　完う　積ひて　世に拾る　蓬松
書本あり　水あり　住ハ　まの山　巣居
永菴の小サ　物の　花よ　へも　江戸　ら周
頭を　花の　物の　花　鹿　り　寥松

光　長　者　ま　子　書　き　を　ま　冥　冥々
あ　佛　拾　て　一　日　伏　ま　ま　秋支
小　男　扇　の　二　ち　て　来　家　象　冥也
梅　良　の　傳　を　や　す　小　お　祐　江戸　素玩
牛　鳴　き　風　ま　行　逢　ま　若　象　對竹
人　更　年　逃　あ　り　山　ほ　と　き　た　冥　平角
房　竈　や　ま　吸　刈　也　山　の　間　北須
ま　ま　の　を　る　ま　ま　象　象　の　ま　素御

出羽 長翠

蕎の雪 冷粉をまぶして 揚ひろ

蕎の花 車に入るる夜の月 素白

吸物と ちらめハ月の 蕎麦哉 稲九

若鮎と 砂金 振ハ 鷺 なり 三夕

夕立や 流ひ出 るつちき 鯉 上野 鷺白

名月や 能 面 皆 人の 松 鹿太

物語の 芽の 紅 ゝ 蕎麦の 玄々

先 ゝ や せ 桑 ゝ 桑の 地 桑 下野 き岐

蕎風や 吹も 正 次も 人の ゝ 雉尾

十 柳の 蝶 ゝ ゝ 蕎 ゝ 蕎 ゝ 小 麦 蕎 麦蕎

八九 年 同 ぬ 在 而 を 蕪の 妹 お種 菖三

旅人の 月代 き き 小 き ゝ ゝ 雉啄

夢草や 何 ゝ ゝ 延 て 夢 ゝ 洞々

き の 雪 一 ゝ 蕎 ゝ 蕎 ゝ ゝ 桑 都々逸

古寺や 牡丹 同 ゝ 写 る 佛生会 下総 京迪

竹の根の ゝ き ゝ 花 胡蝶 栗堂

木かくまて猶孫勝し蓮の花　北尼

蓮をあつまさ　至長

至るも孫の曜（やう）蓮や　常陸　碍山

三日月いとゝ紛蓮よ見るゝ　翠兄

把夫や　枯木鼓を　老て　柳丸

眺い年の欲よ勝り　春の山　三古

花の人柳のけよ　泊蓮　湖中

蓮の二つ　蓮の道　花乎未　天一會

夕ゝや　嫁ゝ　つゝ　蝉の　三及

蓮　蓮の　欲を　鼓蓮　柳の　太郎（五徳）

大利根や　移も　春　孫と　兄直

門ゝや　鼓よ　勝る　柳の　芦月

帰よの　孫い　蓮　小の　蒼海

明やゝ　ゝい　柳　草の　春堂

る貫の　来て　春　柳を　玄雲

柳ゝ　ぬ　ゝの　柳や　秋の　貞明

秋の山みるみけるにて　菅なりけり　越　嫘柯

春寒ゝ吟ずゑ草もありける　安房　郁賀

一里松木槿見られは曇りけり　京　蒼虬

子ひとりて家内ゝ起てあやめかな　千崖

一床入られは擁しぬ作りの花　茂推

紫折りは営ゝぬる夕アヲ那　雲雄

月影や言葉てしく蓋咲　近江　芳之

似るえて睦そ二月の梅の信　可盈

何事侍従ても萩の桔梗かな　守澤

浮草見る人をえみ田植かな　烏頂

ころから皆落え床より花の香　春雄

木踏てあくひしみけりみなさかり　柏翠

床からて帰る家も桔の宿　仙風

傘の中霞すや春の海　千影

紫の戸に住は月見も雪の辺　亐當

日の入を一葉に菊や岡の松　京　芝九

西のそのの秋の柳きはなる　六雪

あみ掛る人のうれるや村雨の末　共成

ひりるの夜明しらや天の川　岱李

秋の夜のまゝ抜茶て茶の煙　玉屑

年経い係ちひて庫ゝ夏　大坂　長亦

きもやぬるゝの浮世をぬくめる　長風

因の氣や二尺ばかりを乱花　豊江

秋の梅いろ〳〵花の足りる弘　春思

吹きひく柳の上り柳の那　春人

ゆさしの赤傳ちけて萩の夏　春哉

見もとよりのさゝやく事山るる弘　蜂友

饅頭て猿よりもん高良の花　魯隠

若年とあるも老さ浪花の巾　京　関雲

第一把あゝ和と第て時ゆ　蕎　空阿

吏行を二家ちて尺ゝるる家弘　棋價

見ゝなき口ゝ因幡の毒あけて　節良

菊の名や奇しきなれを愚めかな　定雅

まのあいぐいくけよ春の月　丈尤

這入よりたるる梅の使の車　月居

月出の恨ミ仏ちる蝉の声　大坂　竹翁

鶯ちしきたるたもむめ　昌　浪甫

若竹もあのよこ　雑皮　深　蛾月

温泉やいかよりふき蜆賣　まち丸

青柳や水の流るる隅田川　丹頂

京を流年一二里元ゆる赤槿　椋雅

俳諧の富士かしらり五月雨　百堂

約束の蝉振舞や寺の山　米彦

伊吉へ行かゆるまて茅葺橋　会庫　桐栖

秋の来て縄もひくの長なり　呉来

蚤蚊やにゝ泡吹きの虫　蘭芝

初戸出や傘のうちより遠柳　一草

散りしき見へぬうきき桂の雨　大坂　夜来

焼芝や数立日ハ尺ぐる鳥の足　井眉

象の一歩踏ひて春の雪　河内　采紀

若菜より向ふ見えぬ東山　大坂　蓬宇

名月の道化を君かすれ　奇閑

うるまるる埃立せて暮の月　釣叟

八十八歩菊菜の苔ら咲まるり　三津人

ゝ年来ぬ驚もあるて沈の外　宇蕉　篤老

姉ぶさに座を置ひ清ふるふ　宇柏

初雪や私のおきぬのうく　濃蛇

山乃口明ゝ雲ゝ雨ゝ　梅佛

初春の明を引や座の松　陵亮

幕の虫啓年来雀こう郎　路宅

梅咲や人の見ぬの蓋恩し　芝雲

氷解の丘勝きき花ぬ　圭雨

夕アとも定沈ゝの蕨まるり　凡十

寒ぬ実ま深や麻のよの鼻　極　玄蛙

[illegible] 大坂 尺艾

[illegible] 麦夫

[illegible] 伊勢 椀堂

[illegible] 伯耆 閑蔵

[illegible] 大坂 喜蔵

[illegible] 東雨

[illegible] 外六

[illegible] 出雲 花叔

[illegible] 長門 麻庭

[illegible] 柳仙

[illegible] 甫重

[illegible] 松宇

[illegible] 古硯

[illegible] 羅凡

[illegible] 豊前 了国

[illegible] 豊後 葵亭

たくもある眠を見送るや長崎　文角（筑後）

雲の下に紙漉なう殿の事　芦月

三日月を一対なる一間子多　軒兆

近江路の雲小路の間の雨　雨蘭

屠蘇やまき宝ある秋の書　瓢風（筑前）

薄をくくり屋るかまのふ　玉嶺

あのよ柳ひとり四方寺　石地

為賊うりの赤き色塔柳　為也（肥前）

紙子くさき形ちくみなるを　鞍風

みちひくと小松城なる芒の穂　吾友

近つきに鳴かるしまの山　洋禾

ちくくと風取りて時田堀　天外

傷炭や物毒はちくしろ前　其映

橋なるの片繰尼や柳の郷　五風

柳ゝるを君飛る家のさそひ　思水

雪は死もて来柳の蓋りの穂　大嵩

草の宮根なのるいこ屋ろ　薩广　青梁

る浪の流ひ出りり色の身　琴別

氣孤よるるさものを楽　かきりる　河波　葦伯

吉芳よ作者すが氣の枯かるる　越後　尤琴

負行や萩よい怪き　秋の衣　年眉

心萩や天北川まて　咲ぬき　五芳

湯紙のちきりく行や秋の雲　路丈

人よかせて墨深くさき　史楠　桃止

桃の花実のなる沙法も取もあ

川岸ゝ欠くくもくり　月影　凧阿

松本の夕陸ま吉る　孔雀弘　遠哺

花墨雲乃家中よ面の降ろり　夏　潤九

打くる焚火を面苔の集あ赤　之醒

行くるなよ楽林　時姿　史方

水ゝゝゝゝ行くさめり墨雲紙　可今

笠の端年さいても入る苔弘　二松

ともしてたえまいとなき蟲かな　立邦

五六丁月おい殘る蕨の森　呂仆

郭公時や月出の沒たるみ　楚吟

起ふしの義よ未なりまの風　有夕

立秋や思ふ孤窠の解けに　住九

涼しさやたに深起を菴の常　一義

ふるさとの汝分となる蛍哉　雨沾

ちるぬ坊の門ふるまる五月ふる　梨青

[illegible]して忘るすのもも十日松　三枝

立秋や蛙ひとり三日月　孫菊

雲の歯くきも合ぬ若葉山　白阿

傘を馬よけとり　秋の風　越中　奥心

連のうけて草いを花をもり　正岱

移まの曲て吹出す蔦の軒　方之

蕊とりて新もちぬや軒角力　白年

ふたえまい一重撫て花の雲　加賀　眉山

歩行よんで歩行死まの麻　鹿吉

紫ハ日の入際よ夏たうは　梅人

山の井の水汲よ来て蔦の花　耳谷

陽もき次之千場よ行ったる　荒淳　儲史

行まの教際祝く小鴨ル　元々

作取のたをりよ摘や花茎　東有

ふらくと昼もあくて実の夏　十寸影

名月や面もを板の浦けしき　一尤

俗笠の志りし月をる宿のうち　越後　何尺

家結よ木草のうも七日の抜　具郭

気るも影も衣ちりこの宗　竹里

茂よ茂て答の世話の思ハる　喜年

木雞校

陸

人性さ多く深をめて交ハ
あ〳〵しく元と性さ保れる
ものあハれなる無ものさ
て至性むなるもの性ちゝ弱
弱を新をとゝくともを程おの
つゝ世情ふ通をてをゝ
彼らをしをも事ふ色し伝
来的を性むく物を立れる

俳はみをのみ 誹儒者より
たゞし多くも世に隠れて人
はあさめぬ浪ゝておしかる風
多るところさし尊きと
蓬とは京におはすれぞに
これをうつし妙なることへ世
て世程をとれる正俳とする也
とのたつまゝ誹諧を弄むて
風流人耳にちて正俳

事をおこゝろを側ら捨れん
を学ひ好まし其俳諧に
送用なる一安に一定一興致され
ことはミ破壊なる所京の
さゞ擬またれこゝして果く
俳華ともひ多る尼法師
とも社俳くして いたれたまえ
雑話に出逢のこゝくきいずは
色をこし なかなかさもすき

をあらはす所、京弘ものもはなを
京極ふ弘しかすなるあるの
なをうさとうなを流くとも
引せる絶ることをまさしく
古をの風言なる風さて
そ弘を毛ゝ到るゝ御指ら
世よつなるれやをく墨を
のこおもてを形めていくき
やつたるゝ年ふるゝ年みるも、

ふせ一をゝみちを案なるゝ
附百弘保そ毛をゝを文
とを年年一とそ正風弘を
こ行とを中なを絶京歴弘
風ゝ弘毛ゝゝ京しのゝ文
さゝ文一ゝ絶やさゝ一ゝ礼と
あゝをを保とゝを法とを仕法
ゝ保とゝ毛まをを年月すも
な我法か茂川の水くさ歴

うまやなを和拙玉まつ、ゝな
る鬼神をゝ盛をゝめゝむいと
おかしつのなり　古人士朗居士
ゝ経ゝ古拙ゝゝゝ猶を引ゝゝと岩
下　新説をゝれゝゝゝゝゝゝ
拙人ゝ　毎下ゝ延寳元和拙
俳諧をゝゝゝゝゝて　古稀拙
おゝをゝゝゝゝゝゝゝゝ其
あゝりの古学角をさゝ手

ふゝゝ人稀なめさ保ゝ拙不
学恨者ゝてゝ世我翁拙俳
諧を好む正春以ゝゝきゝ
なりと云ゝされゝてゝをこの叟
拙遠以来親ゝ友ふまて世保
拙ゝゝゝなのりおの友人
聚者ゝゝゝゝかゝ拙居士拙活
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝあなゝ地ゝ
そ拙遠稲をゝゝゝてゝ拙

集まるあるべきこと程を副て
ゆゆしく孔雀の扇を搖あつむこれや
見もてはやすその業ちゝ
をてつる百ゝ花花目を幾
さて枯木の業もまさ榮る
榮生成ふものゝさゝ深ひ
あゝさゝ花まるあゝぬそ
の

文化九年孟八

夢樹　若人淺

昭和38年3月14日
6×60

京寺丁二条

蕉門書肆
蕉門書肆

井筒屋庄兵衛
橘屋治兵衛
橘